

出席率向上と学力向上の取り組み

— 通学型通信制K高校の実践事例 —

Approaches to the Improvements on Attendance Rate and Academic Skills

— Practical Cases of a Daily-Attending Style Correspondence “K” High School —

次世代教育学部教育経営学科

大塚 敏弘

OTSUKA, Toshihiro

Department of Educational Administration

Faculty of Education for Future Generations

環太平洋大学附属国際科学・教育研究所

大橋 節子

OHASHI, Setsuko

International Institute for Science

And Education

キーワード：不登校，通信制高校，登校支援，学力向上

要旨：平成26年度文部科学省より発表された「不登校に関する実態調査～平成18年度不登校生徒に関する追跡調査報告書～」では，前回実施された平成5年度不登校生徒を対象にした同調査に対して，高等学校進学率の向上とともに，大学進学率の大幅な向上が報告された。そこで，不登校生徒の進学先として，その一翼を担っている通信制高校のなかから，全国でキャンパスを展開しているK高校の登校支援と学力向上における実績と取組を報告し，生徒個々への適切な内容及び時期に負荷をかけること，そしてメンタルケアと共にサポート体制の整備が重要であることを述べる。

I. はじめに

平成26年7月に，文部科学省より「不登校に関する実態調査～平成18年度不登校生徒に関する追跡調査報告書～」(以下，不登校実態調査)が発表された。

今回の不登校実態調査は，平成18年度に中学3年に在籍し，学校基本調査において不登校として報告された41,043名を対象にしたものであるが，平成13年8月に発表された前回調査「不登校に関する実態調査～平成5年度不登校生徒追跡調査報告書」から，いくつかの点において大きな変化が見られた。

本稿をまとめるに当たり，その特筆すべきものとして，3つの数値に注目したい(表1)。

表1 不登校実態調査 H26年度とH13年度比較

	H26年調査	H13年調査
高校進学率	85.1%	65.3%
高校中退率	14.0%	37.9%
大学在籍率	19.0%	6.6%

まずは，不登校経験者の高校進学率が，平成13年度

調査の65.3%から，平成26年度調査では85.1%へと大幅に増加している点である。次に，高等学校中退率が，平成13年度調査の37.9%から，平成26年度調査では14.0%に大幅に減少している点である。

この理由としては，学校現場へのスクールカウンセラーの配置や，民間施設との連携の推進など，不登校生徒に対する支援体制の充実とともに，公立高等学校では，既存の全日制，定時制から，東京都のチャレンジスクールに代表されるような多部制定時制など，生徒のニーズに対応しやすくする様々な改革を実行していることも大きな要因といえる。

最後に，現在何らかの学校に就学している割合が，平成13年度調査の23.0%から，平成26年度調査では46.7%に増加している点である。特にその内訳で，進学先として大学に在籍している割合が，6.6%から19.0%へと約3倍に増加していることに注目したい。

不登校生の中学卒業時点での就学が増加したことと同様に，大学への進学傾向が高まっているのである。

それでは，このような不登校生を取り巻く環境の変化とニーズの変化に伴い，彼らの主要な進学先として認知されている通信制高等学校(以下，通信制高校という)の教育は，どのようにあるべきであろうか。そ

これは、これまでのような単なる全日制高校の受け皿として、高等学校適齢期における統計上の無業者を生まないための社会のセーフティネットとしての存在だけでなく、高等学校卒業後の学生生活、又は社会生活に耐えうるソーシャルスキルを伸ばすとともに学力の向上も担う役割を求められているのである。

本稿では、その一つの事例として、通信制高校でありながら毎日出席をするという通学スタイルをとり、大学進学と学力向上を学校目標としている、私立通信制K高校（以下、K高校）の取り組みを紹介したい。

Ⅱ. K高校の取り組み

1. K高校の概要

(1) 全日型通信制

K高校は広域通信制高校でありながら、毎日の通学を特徴にしている全国的にも類を見ない学校である。主に技能連携制度（次項に記載）を活用し、多様化したニーズに柔軟なカリキュラムで対応している。

現在K高校には、毎日通学している生徒が全キャンパスに約8,868名が在籍している。1キャンパス当たりの在籍生徒数の内訳をみると、30名から500名と、とても幅が広いことがわかる。

(2) 技能連携制度

技能教育施設の指定は、技能教育施設の指定等に関する規則（昭和37年3月31日文部省令第8号）の定めにより、当該施設所在地の都道府県教育委員会が行うこととされている。

K高校の全日型在籍生徒は、K高校に在籍すると同時に、技能教育施設（＝キャンパス）に在籍する。そ

の技能教育施設の専門科目は、通信制高校との技能連携科目とする事で、高校の単位として認定を受けることが出来る。つまり、技能教育施設の授業が、高校の単位として認められることとなる。

(3) 教育目標

K高校では、教育力No.1高校を組織目標とし、3つの教育目標を掲げて活動している。

- ①大学進学率の向上
- ②学校満足度の向上
- ③社会的評価の向上

ここ数年間、特に重点を置いているのが学力向上の取り組みで、「大学進学率の向上」は、平成24年度までは「学力向上とワンランク上の進路実現」であったものを平成25年度より明確に大学進学を教育目標に掲げている。これは、生徒・保護者における大学進学ニーズの高まりの表れともいえる。

2. 生徒の実態

(1) 生徒の現状

①入学前と入学後の生徒のニーズ

K高校では、入学時と毎年6月下旬から7月上旬にかけて、全生徒及び保護者に対して『学校生活アンケート』を実施している。ここでは、生徒アンケートの結果（平成26年度 有効回答数3,844人）から学校に対するニーズを取り上げる。

ア) 入学前のアンケート結果

生徒の結果は、以下の通りである。

- 1位：個人に合った学習体制
- 2位：資格取得
- 3位：個人のペースに合った学校生活

この順位は、2009年の本アンケート実施時から不動である。次の②出席状況で述べるがK高校は約7割程度の生徒が不登校を経験しており、アンケート調査の結果から、先ず高校生活において、1. 基礎学力、2. 友達作りなどの人間関係、3. 登校に不安を感じていることがわかった。

また、K高校では、専門科目だけでなく、一般科目などにも資格取得を取り入れていることが多く、この項目に期待が高いのは、特徴といえる。

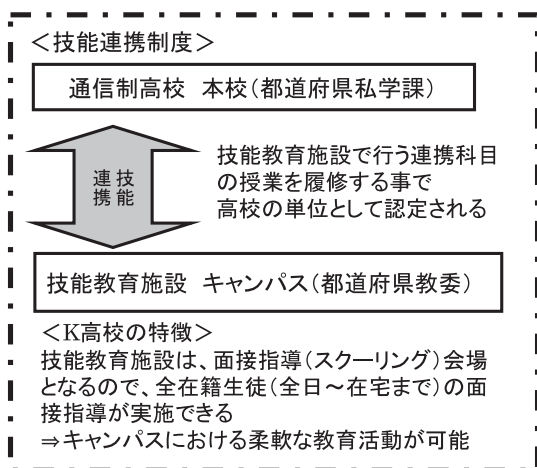


図1 技能連携制度イメージ

イ) 入学後のアンケート結果

- 1位：個人に合った学習体制
- 2位：進学対策授業，進路指導
- 3位：個人のペースに合った学校生活

この結果から，1位と3位に変化はないものの，次に述べる出席状況の変移（図2）からもわかるように，当初感じていた授業へついていけないか，学校に適應できるかなどの基礎的な不安から，高校卒業後の進路につながる学習への不安に移り変わっていることがわかる。このアンケート結果も，5年間ほぼ同様となっている。

また，本稿Ⅰ.はじめにでも述べた全国的な不登校生の進路・進学状況の変化とも，同じような傾向をみるができる。

②出席状況

K高校では，生徒個々の不登校状況の改善調査を実施している。ここでは，平成25年度K高校全日型通学在籍生徒を対象に行われた調査結果（有効回答3,364人）を取り上げる。

調査は，中学校から提出された調査書に記載されている欠席日数を基に，年間30日以上の不登校生徒の割合，及び各年度の生徒個々の欠席日数について調べた。次に，K高校入学後に各学年年間欠席日数を調査した。以下に，その数値を表にまとめたものを記載する。なお，不登校率は69.8%となっている。

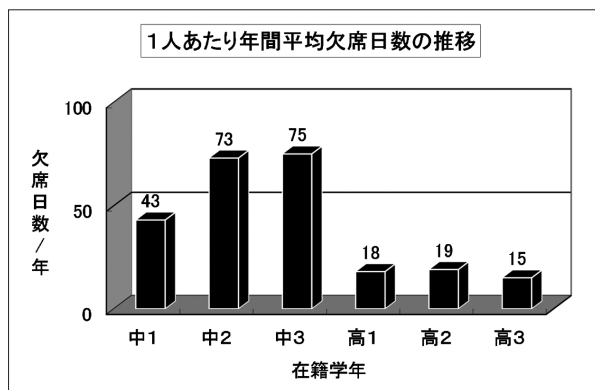


図2 H26年度K高校 在籍生徒の中学・高校時代の年間欠席日数の推移

この表からみても，大幅な出席状況の改善が図られていることがわかる。

また，中学校時代より欠席日数が減少した生徒の割合は74%となっている。

③基礎学力

K高校では，平成25年度より年2回（4月と1月）基礎力診断テスト（ベネッセコーポレーション）という外部模試を実施している。このテストは単なる模試とは違い，英・国・数の学力試験と，進路意識や学習習慣なども判定し，改善につなげることが出来るのが特徴になっている。

ここでは，学力を測る指標の一つとして，他校との客観的な比較ができるこの外部模試の結果を取り上げる。

平成25年度，26年度ともに，1年生の平均はD3という最下層のレベルである。しかし，平成26年度，1年間を経た2年生の平均は2ランク上昇という結果を得た。これは，近畿圏内で同時期に基礎力診断テストを実施した高校の中で，平成25年度1年生4月の結果がK高校と同ランクであった28校の内，2年の4月では，現状維持が23校，1ランク上昇が4校，唯一2ランク上昇しているのがK高校であり，それ以外のランクの学校をみてもほとんどの学校が現状維持か，上がっても1ランクである。

この結果は，K高校の着実な学力向上の取り組みの成果と考えられる。

以下に，その結果をまとめた（表2）。

表2 H26年度2年生対象1年春から2年春の基礎力診断テストの推移

		2年春			
		G T Z ¹⁾	D 3+	D 2-	D 2+
1年春	D 2+			2	5
	D 2-		3	10	6
	D 3+		23	4	K 高校

（近畿地区ベネッセコーポレーション調べ）

(2) K高校キャンパスにおける進級・卒業規定の有無と，大学進学率及び出席率・退学率との関連

①進級・卒業規定について

K高校の全日型キャンパスには，通信制高校としての進級・卒業に関する規定以外に，全日型教育の進級・卒業に関する規定が存在する。つまり，通信制では，進級・卒業が可能であるが，全日型の基準では進級・卒業が出来ない場合がありえるということである。

主な規定内容は，以下の通りである。

- ・全出席日数の1/3，又は60日以上欠席で進級，

卒業が出来ない

- ・遅刻、早退は、3回で欠席1回とする
- ・各授業科目の総授業数の1/3の欠課により欠点となる

規定が設定されているキャンパス（以下、【A群】という）と設定されていないキャンパス（以下、【B群】という）で両者の傾向を対比すると、次のような結果となる。

②進級・卒業規定と出席率、大学進学率、退学率の関連

ア) 出席率（平成25年度）

90%以上の出席率の上位7キャンパスは全て【A群】であり、下位のワースト8キャンパスまでは全て【B群】であった。

イ) 大学進学率（平成25年度）

【A群】の大学進学率平均52.4%に対して、【B群】平均42.2%と【A群】の大学進学率が高かった。

ウ) 出席率と退学率（平成25年度）

【A群】の退学率平均1.3%に対して、【B群】平均2.3%と【A群】の退学率の方が低かった。

③考察

当初の我々の推測では、出席率に関しては、当然進級・卒業規定のある【A群】が高いと考えており、また大学進学率も出席率の高い【A群】のほうが高いと推測し、当然その通りの結果が出た。

一方、不登校生の多いK高校のような通信制高校の場合、【A群】のような規定では、全日制高校と同様に耐えられずに学校を継続できなくなる生徒が多くなるのではないかと推測していた。しかし、結果は【A群】の退学率が低いという結果となった。また、退学者に加えて、学校に合わないので他校へ転校をするという生徒を含めても、【A群】2.8%に対して【B群】3.3%という数値となり、【A群】の方が低い結果となっている。

④結果を受けて

この結果を、K高校の職員研修でも大変お世話に

なっている広島大学大学院教授の栗原慎二先生にお話ししたところ、次のようなコメントを頂いた。「規則というのは子どもへの期待といえる。高いハードルと思えても、子どもたちは、その期待に応えようとそのハードルにチャレンジする。逆に、低いハードルは期待をされていないと考えてしまう。よって、ある程度のハードルは必要である。しかし、ハードルの設定をするならば、それ以上のフォロー体制が必要である。」

現在、K高校では、進級卒業規定の全校導入と、フォロー体制の取り組みであるオンリーワンクラス（別室登校クラス）の設置と運用改善に向けて動いている。（オンリーワンクラスについては後述する）しかし、規定を導入すれば自然に出席率や進学率が上がるわけではない。【B群】の状況分析とともに、キャンパスのフォロー体制の見直しを実施している。この結果が出るのは来年以降となるため、改めて分析、報告する機会を持ちたいと思う。

3. 取り組み

前節で述べたように、K高校では、現在の不登校生が高等学校に求めている「通学」と、大学をはじめとする「進学」ニーズに対して、一定の成果が出ているように思う。

本稿では、その成果の要因となっている取り組みの中でも、K高校で実施されている代表的なものを紹介する。

(1) 生徒指導から進路指導へ

K高校では、生徒の成長過程を3つの段階（生活指導・学習指導・進路指導）に分けて、それぞれに対応した指導を行っている。

①生徒指導と環境整備

生徒の進路実現、学力向上を実現するために、先ずは学校が、通学しても安心で楽しい環境でなければならない。

そのため、K高校では、全国の通学型生徒に対して、制服着用を義務化し、同時に服装・頭髪等の規定を統一して運用している。

また、登下校時、廊下などですれ違った時、授業開始、終了時など、学校生活のあらゆる場面での挨拶指導を強化している。それが単なる挨拶にとどまらずに、生徒の状況把握や、お互いの信頼関係構築

につながる手段として意識されるようにしている。

また、生徒指導課担当者によるキャンパス間での情報の共有、事例の検討、指導基準の検討など生徒指導に関する打ち合わせや、職員研修を1か月ごとに実施している。また、彼らが中心となって、他キャンパスの教室・廊下などの掲示物や、整理・整頓、清掃など、定期的にチェックする視察を実施し、来校者や第三者からの視点を確認し、環境整備や生徒指導体制の改善を行うように努めている。

②学習指導

ア) 基礎学力オールチェック

新入学生に対して、高校の学習への導入を目的に、数学と英語の中学校3年生までの内容を25～30単元に分けたチェックテストを行い、正答率80%未満の単元に関して補習を実施し、生徒個々の基礎学力の定着を図っている。

毎年9割以上の生徒が全単元合格となっているが、この取り組みは単なる基礎学力向上のためだけでなく、やればできるという、学習の楽しさと、生徒に自信を持たせることにより、それ以降の学習への意欲を高める機会にもなっている。

なお、2、3年生に対しても、それぞれ、1年次及び2年次の基礎学力定着のための試験と補講を実施している。

イ) 習熟度別授業

原則、英語・数学に関しては、習熟度クラス編成を行い、それぞれのレベルに応じた指導を行っている。年に、3回程度の試験により習熟度の見直し、生徒の入替を実施し、幅広い学力層と進路ニーズの変化に対応している。

③進路指導

ア) キャリア教育

大学、専門学校との連携授業や、出張講座の開催、また、小論文や情報の授業の一環で、職業・進路調査、プレゼン等の内容を取り入れ、3年間を通じた進路意識を持たせるための取り組みを行っている。

イ) 進路別カリキュラム

それぞれキャンパスの特徴に合わせて、国際、福祉、保育、IT、芸術、ダンス・パフォーマンスなどのコースや専攻、また、受験レベルの教科

学習や、推薦入試対策、資格取得を目的とした選択授業を設定し、キャリア教育で興味を持った進路を実現するためのカリキュラム開発を行っている。

ウ) 視聴覚教材

予備校や教材会社と提携し、基礎から難関大学受験対策までを網羅した視聴覚教材を、パソコンやタブレットで利用できるように配信している。

学校で行われている通常授業とのリンクにより、予習・復習など家庭学習の推進が図れる。また、放課後の補講などにも活用することで、受験勉強においても、学校でサポートできる環境が作れるなど、単なる教材としてだけでなく、学校の教育活動とも連携を図れる教材として活用されている。

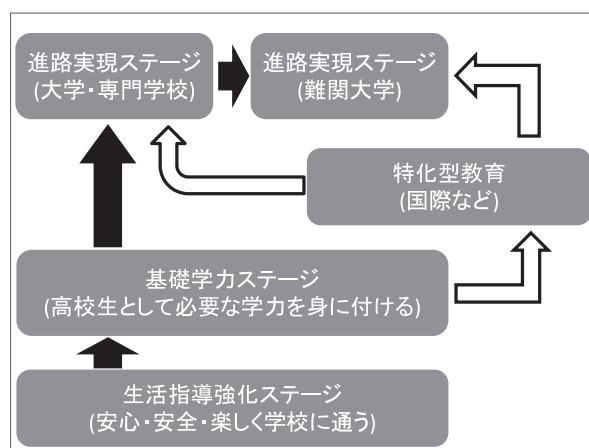


図3 K高校発達段階における教育概念図

(2) オンリーワン（別室登校）クラスの整備

不登校経験者の割合が高いK高校の場合、クラスに長期欠席や五月雨登校が続く生徒が複数名存在すると、他の生徒にも影響が及び、クラス全体の出席率が低くなる場合がある。その対応法として、キャンパス内にオンリーワンクラスという不登校生の居場所を作り、集団クラスへの復帰を目指す活動を行っている。

このオンリーワンクラスの適切な運用が、生徒一人一人の状況をしっかり観察し、微妙な変化に気付き早期の対応を行うことを可能とし、結果的に退学の予防にとどまらず、クラス全体の出席率の向上、そして間接的にはあるが学力向上にもつながる重要な役割を果たしていると考えている。

以下に、その概要を説明する。

①オンリーワンクラスとは

ア) 全日型在籍生で、長欠状態になった場合、一時的に元のホームルームクラスから在籍を異動させ、全日型の進級・卒業規定を除外し、再び登校ペースをつかみ、毎日登校できるように支援するクラス。

イ) 対象生徒は、原則1年生。再度毎日通学する意欲のある生徒で、30日を超える欠席又は出席率が40%を下回る生徒。また、集団への参加が困難など、その可能性がある生徒。

②オンリーワンクラスの運用

ア) オンリーワンクラスへの異動は、生徒の状況を見ながら適時行う。特に、長欠状態が長引き、生徒が再登校に向けたエネルギーを使い果たす前に移動させることが重要である。

イ) オンリーワンクラス担当と、担任、保護者との連携により、生活リズムの安定、登校の安定、友人関係の構築、復帰を想定しているクラスでの行事参加を通じての仲間づくり、テスト受験、課題の提出など、段階を追って自分で負荷を乗り越える力と、一人でなく仲間と伴に乗り越えるという経験を積ませて、全日型への復帰を図る。

Ⅲ. 最後に

学校教育の社会的使命の一つが、社会に有益な人材の輩出であるならば、高等学校の果たすべき役割は、卒業後の社会、高等教育機関などの進路先で通用する人材の育成であり、その社会的責任は極めて重く、重要である。

入学までの経緯に個人差があるK高校を含めた通信制高校や不登校生が多く進学する学校の場合は、学力や進路意識、社会性の発達状況など、どの視点をとっても大変幅広い生徒が在籍している。よって、通常の生徒層が似通っている輪切り型の高校教育では、対応することが大変困難であるというのが課題となる。

通信制でありながら全日型で教育を行うK高校のスタイルは、柔軟な発想で教育活動やカリキュラムを設定できるという制度上のメリットと、また不登校や高校からの転・編入生徒を多く受け入れてきた経緯から、一人一人をしっかりと見て、寄り添いながらも、目標に向かって指導・支援できる教師を育成するという、本来あるべき教師の姿を、追い求めた結果、新しい高等学校の形をあらわしているように思う。

一方、高等学校の新しい社会的ニーズの高まりと共に、規制緩和による学校設置認可基準の緩和などを追い風に、通信制高校の校数は増加をしたものの、高校卒業資格をお金で売っているなどと揶揄されたように、ほとんど勉強をしないでも高校卒業資格が取れるという、その手軽さを売りにして生徒数を急激に伸ばした一部の私立通信制高校による悪評が発端となり、私立通信制高校そのものに対する社会的な不信任も存在しているように思う。

しかし、ここで紹介したように、通信制高校は、全日制高校の補完機関としてはもちろんのこと、特色ある新しいタイプの学校として、その役割を十分果たす可能性を持った学校であると考えられる。

全国で教育活動を行っているK高校では、あるキャンパスの結果を分析し、有効な取り組みを全国で共有し広めることで、全体の教育レベルの向上を図っている。これからも、このような実践活動を体系的に提示し、我が国が抱える不登校問題の解決の一助となるように、研究、報告の場を持てれば幸いである。

注記

1) 学力到達ゾーンの略称。生徒の学力レベルをA1+～D3-までの24段階で表す。

参考文献

文部科学省

平成13年不登校に関する実態調査～平成5年度不登校生徒に関する追跡調査報告書～

平成26年不登校に関する実態調査～平成18年度不登校生徒に関する追跡調査報告書～